

学習者の発話には何が欠けているか —ロールプレイ発話の会話分析—

名嶋義直

東北大学大学院文学研究科

1. 背景—日本語教育文法構築の動き—

近年、新しい日本語教育文法を構築する活動が盛んに行われている。たとえば、『AJALT 30周年記念特別号』では『『初級』を再考する』と題して、「現場から初級文法を考える」動きと「コミュニケーションから文法を考える」動きとを紹介している¹。ここで気をつけなければならない点は「文法」という語で何を指すか、という点である。この点を取り違えると、「受身は要るか要らないか」といった短絡的な議論に陥りかねない。もちろん、「文法」を狭い意味(本来の意味)で用いることはなんら問題ではないが、新しい日本語教育文法を論じるのであれば、そして「コミュニケーション」というものを言語教育の目標とするのならば、これまでのいわゆる「日本語学的な意味での文法」の世界だけに留まることは建設的ではないのではないだろうか。それは「文のための文法」を論じているにすぎないからである。そこで「文法」という表現を広く捉え、「コミュニケーションのための文法」にはどのような要素があるかを探るため、母語話者の発話と学習者の発話とでは何が異なるのか、について観察してみることにした。

2. データの収集と本発表の概要

「会話」という活動を選んだのは、まず学習者のニーズが高いということ、そしてサンプルの収集が容易であるからである。母語話者会話は2007年4月開講の授業「日本語教育論特論Ⅰ・日本語教育学各論」の中で受講生の協力を得て録画したものである。学習者会話は2005年10月から2006年1月までの期間に行った授業「日本語D(会話)」において、ポートフォリオの一部として録画したものである。ロールプレイの内容は「引っ越しの手伝いを頼む」「店に問い合わせをする」「レポートの期限延長を頼む」「教員にアポを取る」「誘う・断る」などである。当該授業以外の研究目的で使用するについては全員に説明・依頼をし、許可を得た。

それらの資料の観察から、本発表では、会話データを会話分析の視点から考察し、母語話者の会話と学習者の会話との間には「スモールトーク」²「ターンテイキング」³「メタ言語的注釈」⁴「話題展開」「会話の終結」などの点において質的な相違が見られたことを発表する。

3. 考察

3.1 スモールトーク

「スモールトーク」は会話参加者間の人間関係を活性化し、コミュニケーションを円滑に進めるために活用される。言い換えれば、その必要がない場合は使用されないこともある。学習者会話の観察から伺えることは、「スモールトークの意味・機能を理解していない」ということである。たとえば、次の例は「スモールトークを使用すべきなのに使用しない」例である。状況設定は「高校の後輩にキャンパスで偶然再会する」という設定である。

(1) [非母語話者：引っ越し手伝い依頼 1]

先輩：はい王さん久しぶりですね：

後輩：久しぶりです =

先輩：=はいあのう私は今住んでいるところは、あ、ちょっと狭いので、あ：引っ越そうと思いました

非母語話者会話には「形式的な使用」例も見られた。「冗長で結束性に欠ける」例もあった⁵。

(2) [非母語話者：引っ越し手伝い依頼 2]

先輩：久しぶりです

後輩：あ、先輩、お久しぶりです、お元気でしたか：？

先輩：あ：おかげさまで元気です、はい、え：と、実は、まあ、突然で申し訳ございませんが

以上から「スモールトーク」の使用に関して母語話者会話と非母語話者会話とでは違いがあることが明らかになった。積極的な教育が必要である。

3.2 ターンテイキング

母語話者会話を分析すると、内容の点でも発話の長さの点でも比較的小刻みにターンのやりとりをしながら会話を協働構築していることがわかる。ターンを取らない場合でも「あいづち」を打ったり「うなづき」を入れたりして協働構築を行っている。しかし、母語話者の会話を見てもみるといくつかの問題点があることが観察される。

まずターン内の発話の内容や長さの点で違和感を感じる発話を挙げる。母語者発話では「一気に一文をしゃべりきる」ということはせず、「文節」を「潜在的な完結点」の主な単位としていることが観察された。そのため「文節」の後ろには「短いポーズ」があったり「長音化」されていたりする。いわば、話し手が聞き手に対し意図的に「潜在的な完結点」を明示していると考えることができる。それに対し、非母語話者発話の場合は、「一気にしゃべりきる」スタイルのものが散見された。

次に、あいづちが適切に打たれていない例を挙げる。母語話者会話の場合、「潜在的な完結点」が「ターンの適切移行場」とならない場合、そこでは非常にスムーズにあいづちが打たれる。しかし、非母語話者会話の場合、発話の意味の理解に集中するためか、あいづちを打たなかつ

たり、遅れて打ったりする（その時相手はすでに次の発話に入っている点に注意）場合がある。

会話の流暢さを作り出す要因の1つとして「スムーズなターンテイキング」や「適切なあいづち」がある。とすれば、非母語話者の会話は「流暢さに欠ける」と否定的に判断されかねない要因を内包していることになる。「長い文が一気に言えること」が「会話の流暢さ」に必要なのではなく、「適切に区切って話せる」ことの方が重要な能力であると言えよう。

3.3 メタ言語的注釈

「メタ言語的注釈」が「自然な日本語」にとって重要な要素であることが研究から明らかになっている⁶。ただ「メタ言語的注釈」も発話されればよいというものではない。適切な箇所適切な発話が求められる。しかし学習者の発話を見るといくつかの問題点があることがわかる。

まず、非用がある。「悪いんですが」と教員相手に発話したり「～と思います。」のように言い切ったりというような、適切な語や形式を選べないという問題もある。また、「何について注釈を加えるか」という点も重要である。例えば、「レポートの期限延長依頼」という状況設定でRPをしたところ、母語話者の場合「背景→現状」という順序で注釈が行われ、それが「カラといった言語形式を使って理由であることを明示する」ことなく「理由として」提示される場合が多かった。しかし、非母語話者の場合は「背景」か「現状」のどちらかが「カラやノデ」を伴って「理由として」明示される場合が多かった。母語話者の発話はいくまで「背景や現状の叙述」であるし、「因果関係」は聞き手が復元するものであることを考えると、非母語話者の発話は「一方的な論理」で「因果関係」を提示しようとするものとして、否定的な評価を受ける恐れがある。このようなコミュニケーションのタイプの違いも重要な教授項目であろう。

3.4 話題展開

どんなに正確な文法で発話しても、どんなに丁寧な語を選んでも「話してはいけないこと」を話してしまっただけはやはり誤用である。ひとまとまりの会話が複数のトピックから成り立っている場合、何をどんな順番で言うか、何は話さないか、ということは大きな問題である。この点においても学習者の発話には問題点が観察された。まず「話題にしない方がいいことを自分から話題としてしまう」例である。次は、「前提とすべきではないことを前提としている」例である。「何を話すか」は「どう話すか」につながる重要な問題である。

3.5 会話の終結

会話は「言いたいことが言い終われば終わり」ではない。どちらかが「会話を閉じたい」という意思を明確にし、相手がそれに賛意を示す。双方が「会話を閉じることを了解したあとで「会話の終結」が宣言される。このような一定の定められた順序があることが明らかになっ

ている。「会話の開始」もそうであるが、学習者の発話を見ると、相対的に見て「会話の終結」の方により大きな問題があると思われる。「会話終結の意思表示」もせず、「会話終結への賛意」を確認もせず、一方的に「会話の終結」を宣言する例が見られる。

4. まとめ

以上の考察から、学習者の会話には「構造的」な問題点と「意味的」な問題点とがあることが明らかになった。あえてこれらをまとめるならば、「会話という営み」の中で「何をどんな風に言うのか」「どんな風に振る舞うのか」という問題意識が欠けているとも言える。

これまでの会話教育は「学習した文型を使う応用練習」や「発話内行為中心の機能を重視した発話練習」として位置づけられていたように思われる。つまり「何か中心となる表現」があり、それを言えるようになることが目的とされていたと言えよう。しかし、本当の会話というものは1つの有機的な構成体であり、それゆえに「会話として」存在していると考えられる。「コミュニケーションのための文法」を再考するのであれば、日本語学的な文法に留まるのではなく、談話・会話といった「運用面における文法」を今まで以上に上げていく必要がある。

注

- 1) 前者の例として菊地 (2007) が、後者の例として小林 (2007) が挙げられている。
- 2) 「近況について述べ合う」などのような、会話の本題に入る前に行われる「一見すると本題とは無関係に思われる内容のやりとり」を指す。
- 3) 「会話の順序取り」とも言う。ここでは単純に「発言する人間の交代」を指している。
- 4) 大まかに言うと「聞き手への配慮として」発話される「注釈的表現」を指す。例えば、「申し訳ないんですが」は自身がこれから行う言語行為を「相手に対して申し訳ないと捉えていること」を注釈しており、「お願いがあるんですけど」は自身がこれから行う言語行為の内実を注釈している表現である。
- 5) 紙幅の都合もあるため以下ではスクリプトの予稿集への記載を省略する。
- 6) 金城・玉城・中西 (2007) を参照。

参考文献

- 菊地康人 (2007) 「受身は『難しく役に立たない』かー現場から考える『初級文法教育、こうしたら』ー」, 『AJALT』第30号, 社団法人国際日本語普及協会, pp. 18-22.
- 金城尚美・玉城あゆみ・中西朝子 (2007) 「日本語非母語話者のメタ言語行動表現に関する一考察ー配慮という観点からー」, 『琉球大学留学生センター紀要 留学生教育』第4号, pp. 19-41.
- 小林ミナ (2007) 「コミュニケーションから文法をみるーこれからの文法教育がめざすものー」, 『AJALT』第30号, 社団法人国際日本語普及協会, pp. 23-27.